

「あとちょっとだよ、ラフレ。足を開いて、おまんこの中が見えるように自分の指で広げれば、大好きなクニニしてもらえるよ？」

魔力ゼロを治すためにセックスして欲しかったただけなのに……………

1 魔力ゼロを治したいのでエッチしてください

「んゝ……よく寝た……！」

んん、と背伸びをしてあくびをしていると、部屋のドアが叩かれた。

「お嬢様」

「メイサ……………？どうぞ」

目をゴシゴシ擦りながら返事をする、侍女のメイサが部屋に入ってきて、いつも通り、朝の支度を手伝ってくれる。

「今日は、なになさるんですか？」

「今日は授業ないから、一日図書室にいこうかな……」

「じゃあ、ゆったりしたワンピースにしましょうか」

メイサは、毎日、私の行動に合わせて服を選んでくれる。

まあ、ほとんど家から出ないのだからおしゃれをする必要もないのだけれど、メイサは可愛い服を着ると気分が上がりますよと律儀に毎日考えてくれるのだ。

「そろそろ朝食の準備が整う頃ですので、移動しましょう」

メイサと一緒に、みんながいるダイニングルームへ移動する。

シェフのミドルが作るパンは絶品で、ダイニングルームへ行く途中のキッチンからパンのいい匂いがして、歩くスピードがゆっくりになる。

「いい匂い……ミドルが焼くパンはどうしてこんなにいい匂いがするのかしら……私が焼いてもこんないい匂い出なかったわ……」

「また教えて貰えばいいんじゃないですか？」

他愛もない会話をしながら、ダイニングルームへ行くと、すでに父、母、兄は着席して、今日のみんなの予定について話し始めていた。

「おはよう、ラフレ」

私に気がついた父が、にこりと笑って挨拶してくれた。それに続くように、母、兄が挨拶をする。

「おはよう、ラフレ。よく眠れた？」

「ラフレ、今日もお寝坊だな。ほら、座りな」

兄が隣の椅子をぼんぼんと叩く。

「じゃあ、みんな揃ったから、朝食を頂こうか」

お気に入りのミルドお手製パンにバターを塗る。パクツとかぶりつくジュワ〜とバターとこんがり焼けたパンの匂いが口いっぱい広がる。

「今日も、美味しい……」

「あ、そうだわ、ラフレ。セレナちゃんからお手紙来てたわよ」

「えっ……なにかな……」

母から手紙を受け取って封を開く。

（遊びの誘いかな……）

「セレナなんだって？家へ遊びにくるのか？」

気になるのか、兄が手紙を覗こうとしてくる。

「ううん。今度買い物に行こうって」

——ラフレ、今度の土曜日、買い物に付き合うこと——

セレナは相変わらず強引だ。しかし、その強引さに救われているところもあった。魔力ゼロの私は、学園で馬鹿にされて、家に引き籠もりがちになってしまったのだ。そんな中で、幼馴染のセレナだけは家へ遊びにきたり、逆に家に誘ってくれたり、変わらない態

度で接してくれた。私にとってかけがえのない友人なのだ。

「いいじゃない！お買い物！ラフレ、お家に籠りっきりなんだから、たまにはお外へ遊びに行ってきたさい」

「……うん」

渋々返事をする。

買い物なんて人いっぱい嫌だけど、行きたくないって言っても絶対迎えにくるもん、セレナ……

「セレナ、何時に迎えきてくれるんだ？」

「んーとね、二〇時。お兄様は今日お仕事ないの？」

「まあな。ラフレ、何かあったらすぐ俺に言えよ。セレナによろしくな」

ぽんぽんと頭を撫でて部屋に戻っていく兄。

兄とすれ違いに、馬車が家の前に止まる音がする。セレナが着いたようだ。

「メイサ、お父様とお母様に出かけたって言っておいてね」

久しぶりにキュッと腰の締まるワンピースを着た。メイサが選んくれたのは、淡いピンクに白のレースが印象的なワンピース。バックリボンが控えめで可愛い。

「セレナ、今日もお迎えありがとう」

「ラフレ！よかった、家から出てきてくれて。もう少しで部屋まで行くとこだったわ」

「セレナ、私と一緒に買い物へいくって決めたら絶対連れていくじゃない……もう、諦めてるわ……」

「だって、最近一緒に買い物してないじゃない！カフェ・ルージュ、新作出したらしいわよ。どう？気になるでしょ？」

「……………気になる……………」

まんまと口車に乗せられて、馬車に乗り込む。セレナは引き籠もりがちな私を外へ連れ出すために色々考えてくれていることを知っている。嫌がった態度をとったりしてしまうが、内心感謝しているのである。

馬車で数十分走ると、街が賑やかになってくる。セレナ付きの護衛と一緒にいつも通りお店を回る。

「まづここ！学園の帰り道にこのお店の前通った時、絶対ラフレに似合うワンピース見つけたんだよね！」

手を引いて、パープルの壁と、黄色の屋根のお店にの前にスタスタ入っていくセレナ。ガラスのショーウィンドウのなかに飾られたマネキンを指差す。

「見て！絶対ラフレに似合うし、気に入ると思う」

大好きなミントグリーンが生地で、裾がふわりと膨らんでいるワンピース。腰回りはキュツと太めの紐で締められており、レースが縫われていた。

「かわいい……………」

「ね？」

セレナに手を引かれてお店に入ると、巻き髪の店員が試着室を案内してくれる。体のラインが綺麗に出て、これはお気に入り１着になりそうだ。着替えて、セレナに見せると、
「可愛すぎっ！どう？気に入った？」

「うんっ……………」

セレナのおかげで久しぶりに心惹かれるワンピースを買えて、外に出るのも悪くないかもと思いはじめた。

それからいろんなお店で買い物して満足できたので、休憩しようと久しぶりにカフェ・ルージュへ来た。

「久しぶりのカフェ・ルージュ……………」

セレナに誘われない限り来ないから、数ヶ月ぶりである。新作が色々出ていて、何を食べようか中々決められない。

「何個か気になるケーキ選んで、シェアして食べよっか」

セレナが提案してくれて、お互いに気になったケーキを何個ずつ選んだ。私は、いろんなフルーツが宝石のように輝くフルーツタルトと、いつも頼むチョコケーキを、セレナは、新作のモンブランと、桃のタルトを頼んだ。

テラス席が空いてたので店員さんに案内してもらおう。爽やかな風が気持ちいい。

「新作のフルーツタルト、可愛すぎるっ……！」

頼んだレモンティーも届いて、カフェタイムスタート。

「セレナが選んだケーキも可愛くて、美味しそう……」

「あげるわよ……最近どう？なにして過ごしてるの？」

「何って……変わらずだよ。先生が来てくれて、勉強してる……セレナは？」

「私の方も変わらずねー。もう少しで試験があるから忙しくなるくらいかしら」

「そっかー。じゃあ、試験終わるまであんまり遊べなくなっちゃうね」

「試験期間なんて1週間くらいだからすぐよ。それより、ラフレ、最近、ロディオ様に付き纏ってる女がいるって聞いたんだけど、誰か知ってる？」

「えー知らない」

「あの、ロディオ様よ！女っ気がないことで有名なロディオ様に女性の噂が立つなんて……」

セレナは、婚約者がいるにも関わらず、兄に憧れていて、こうして色恋沙汰について聞いてくるのだ。

「エドワードに怒られるわよ」

「ロディオ様に対する気持ちは憧れだもの。別にいいじゃない」

「エドワードみたいな優しい恋人がいて羨ましい……」

「恋したいなら、まず引きこもりから直さないとね」

セレナは、私がどうしてこんな状態になったのか知っているから、度々面白い物に誘ってくれたり、時には、厳しいことも言ってくれる。

「わかってる……けど、学園に戻るのは、無理……もう、あんな思いしたくない……」

「学園には戻らなくていいんじゃない？でも、社交界にはそろそろ出ないと、いつまで経っても変わらないままよ？あの日から一度も外での交流してないでしょ？」

魔力ゼロを馬鹿にされたり、いじめの標的にされたせいで、人と関わることが怖くなってしまった私は、学園に行けなくなった日から外との交流を1度も行っていない。

家族は、私の気持ちを尊重してくれて、無理して外に出なくていいと言ってくれているが、本当は、引きこもりがちになってしまった私を心配していることはわかっている。

「うん……せめて、家族でお呼ばれたパーティーには出ないと思って思ってるんだけど、

みんな魔力ゼロの私のことを馬鹿にしてるんじゃないかって怖くなっちゃって……」

この世界は、日常的に魔物が出る。魔力の質が高く、魔力量が多いものは騎士団に所属し、高位の魔法を使い、魔物を倒すことで平和が保たれているのだ。騎士団は、国民からすれば、敬まい、憧れる存在なのである。

魔力を持って生まれ、成長と共に魔力量は増加、質も向上していくとされる。ある程度の年齢になるとその成長が止まり、その人の魔力量、質が決まる。それが一般的なのに、私は、魔力ゼロで生まれた。成長しても一向に魔力が増えることはなく、ここまで来てしまったということだ。普通、相手の魔力量を本能で感じることができらしいのだが、魔力ゼロな私は、他人の魔力さえ感じることができない。

「ラフレに変わりたい気持ちがあるなら、変わるわよ」

セレナは、落ち込んだ私を励ますように、ケーキの一番美味しい部分をくれた。

「じゃあ、私、弟のお土産にケーキ包んでもらってこるからちょっと待ってて」

セレナがケーキを包んでもらっている間、お店の前で待っていると、聞いたことのある声が聞こえてくる。

「あれ？久しぶりだな」

ニヤニヤした顔で近づいてきたそいつは、魔力ゼロを馬鹿にして、かつ、私をいじめて学園から追い出すように指示していた男の子だった。他の2人も知っている。

「久しぶり……です」

「こんなのところで何してるんだよ。魔力ゼロのくせに！なあ？お前って何ができるんだよ」

学園でいじめられていた過去がフラッシュバックしてきて、動けなくなる。向こうは、そのまま続けて、

「お前も可哀想だよな。親のせいで魔力ゼロで産まれたんだろう？兄貴も、魔力ゼロの妹の面倒見なきゃいけないなんて可哀想だな」

今まで、私自身を馬鹿にされることはあっても、家族を馬鹿にされたことはなかった。グッと拳を握った。なんとか言い返そうと口を開いたが、なかなか言葉が出ない。

「ちょっと！何してるのよ！」

お土産の袋を持ったセレナが店から出てきてくれたおかげで、男の子たちは、走って去っていった。

「ラフレ！大丈夫？何言われたの？ほんと！あいつら許さない！！」
走って追いかけようとするセレナを止める。

「大丈夫！！セレナ……大丈夫だから……」

セレナにバレないように普段通りを装って、家まで送ってもらったが、帰り際も心配そうな表情をして何度も何を言われたのか聞いてくれた。

家族に、疲れてしまったから、今日は夕食を食べずに寝ると伝えて、部屋に籠っていると、兄が部屋を訪ねてくる。

「ラフレ？何かあったのか？夕食いらないなんて」

「んーん！何もないよ！ケーキ食べすぎちゃってあまりお腹が空いてないだけ……」

「……………そうか。…………ラフレ、皆ラフレの味方だからな」

兄の優しい言葉に涙が溢れる。だか、その優しさが逆に苦しい……

（私が、弱いせいで家族まで馬鹿にされてしまった……私に少しでも魔力があったら馬鹿にされなかったのかな……）

枕に頭を埋めて静かに涙を流す。

「泣いてばかりじゃだめだ……セレナは、変わりたい気持ちがあったら変われるって言うてくれた……いつまでも甘えばかりじゃだめ……！」

魔力ゼロを克服するために、まず、セレナにお医者さんを紹介してもらうことにした。家族に相談したら学園へ行かなくなった理由がバレて、もっと心配をかけてしまう思ったので、唯一相談できるセレナへお願いすることにした。

久しぶりに私からセレナに手紙を出すと、すぐ返事をくれて、家へ遊びに行くことになった。

「あら？お庭にでも遊びに行くの？」

他所行きの服を着て、階段を降りていると、2階に行こうとしていた母に話しかけられる。

「ううん。セレナのお家へ遊びに行こうと思って……」

「あら、そう！遅くならないうちに帰ってくるのよ」

にこりと微笑んで送り出してくれる母。

エーデル家の従者、ロシエが付き添ってくれる。ロシエは口が硬く、私がお願いすれば、家族には秘密にしてくれるので今回もお願いした。

「お嬢様、そろそろ着きますよ」

外を眺めていたロシエが本を読むことに夢中になっている私に教えてくれる。

「もう……!?!大変……!!ロシエに話しておかないといけないことがあったのに……」

「なんででしょうか?」

「もう、セレナのお家に着いちやうから……1つだけお願いがあるの……セレナのお家で
どんなことがあってもエーデル家の皆さんには内緒にして欲しいの……ロシエにしか頼め
ないのっ……!!お願い、ロシエ……」

「……………わかりました」

ロシエは、少し複雑な顔をしていたが、数秒考え、了承してくれた。

「ロシエ……!!ありがとうございます……」

ロシエが了承してくれたおかげで少し安心した私は、落ち着いた足取りでセレナの家へ
足を進めることができた。

「いらっしやい!ラフレ!待ってたわ!先生、少し遅れるそうだからあっちで待ってましょ
う。ロシエも久しぶりね」

「セレナ様。お久しぶりです」

「そうなのね……。セレナ……あの、今日は、本当にありがとう」

神妙な顔でセレナにお礼を言うと、

「親友として当たり前のことをしただけよ」

緊張しているのを察してくれているのか、セレナは侍女に頼んでカモミールティーを出してくれた。

セレナが席を外すと後ろに控えていたロシェが近づいてくる。

「ラフレ様。先生とは一体どんな方なのですか？何をなさろうとしてるのですか？」

「先生は先生よ……安心して。危険なことをするわけじゃないわ」

「セレナ様とご一緒なら大丈夫かと思いますが……」

ロシェの質問に答えていると、セレナが先生と呼んでいた人物を連れて部屋に戻ってきた。

「先生！この子が話していたラフレです」

暗めの青い髪に、青い瞳が印象的で、シワ1つない白衣を着て登場したこの方が、魔力について研究しているクラウス先生らしい。

「ラフレ、です……！」

「初めまして。クラウス・アルナーです。クラウス先生とでも呼んでください」
優しい微笑みで握手を求めるクラウス先生。

「あのっ……ありがとうございます……」

「魔力ゼロを治したい、という依頼だったかな？」

「……はい……セレナに、先生なら魔力をゼロから増やす方法を知ってるかもと聞いて……」
「そのことについては、検査をしてから話をしようと思う。少しでも検査の時間をもらえるかな？」

「……はい……！お、お願いします……」

セレナとロシエには部屋の外に出てもらって、先生と2人きりになる。

「緊張なくていいよ。僕がラフレさんに魔力を流すだけだから」

先生に手を握られる。ほんの少し先生と触れている部分が熱く感じる。

「ありがとう。検査はこれで終わり。話を始めようと思ってるんだけど、2人を部屋に呼び戻す？ラフレさんだけで話を始めようか？」

「いえ……2人にも聞いてもらいたいです……」

「わかった。部屋に戻ってきてもらおうか」

2人に部屋へ戻ってきてもらって、先生に話を始めてもらう。

「まず、検査の結果からだけれど、確かにラフレさんに、魔力は感じないね。で、魔力をゼ

ロから増やす方法についてだけど、僕も論文でしか見たことしかないんだ」

「論文ということは、実際に増やせた方がいるのですか……！小さい頃、両親が何人ものお医者様を呼んでくださったのですが、皆さん不可能とおっしゃるだけで……」

「魔力ゼロから増やした実例はあるんだけど、論文から読み取ると、条件がかなり厳しいんだ。可能性としてはかなり低い」

先生が渋い顔をするが、私は、この魔力ゼロの状態から抜け出せる可能性を少しでもあると知って、胸が高鳴った。

「教えてください……！可能性が低くても試してみたいのです……」

真っ直ぐに先生を見つめる。

「お嬢様……」

事情を把握し、びっくりしたのか、ロシェの目はまん丸で今にもこぼれ落ちそうである。「わかりました。論文の詳細をお教えます。デリケートな部分になるのでどう実行するかは、セレナさんと話し合うのが良いと思います。あと……よろしければ研究させていただきますか？」

「研究……ですか？もちろんです……！先生の研究に協力することで、私と同じ悩みを抱えている方のためになることもあるかもしれませんから……」

魔力をゼロから増やす方法を聞いていないのに、研究を了承しまった私は、後々、後悔することになる……………

「先生……！その、やり方を……教えてください……」

一体どんな方法があるのかと、皆息を呑んで先生を見つめる。

「ええと、質のいい魔力を含んだ精子を大量に子宮にかけてもらうというやり方です」
予想外の言葉が先生の口から出てきて、皆フリーズする。

「……………せ、精子を……」

この世界は、魔力量と性欲の強さが同じくらいになるため、性に関する授業もしっかり行われるのだが、学園を辞めた私は最低限の知識しかない。妊娠する方法とか……

恋愛小説を読むのは好きだから、そういった行為に興味を持ったことはあるが、魔力ゼロなので誰も恋人にしたいと思わないらしく、恋人ができたことはない。

行為をしたことがない私にとっては、恥ずかしすぎる言葉で、顔がどんどん熱くなっていく。

逆に、ロシェとセレナはすぐ飲み込めたようで、そんなことでいいのねと言いたそうな顔。

「おふたりは、そんなことといった表情ですが、誰の精子かが大切なのです。高位の魔力を持ち、かつ、大量にですよ」

「た、確かに……」

「ラフレ様に恋人はいらっしゃらないと伺っています。このことを誰に頼むかは、お任せします。なにか変化を感じたら私に教えてください。では」

「わ、わかりました……！先生、ありがとうございます……！」

すでに誰に頼むか悩み始めているロシエとセレナを置いて、先生を部屋の外まで見送る。

部屋に戻ると、2人はすでに選定を始めているようだった。

「ち、ちよつと……！2人とも……！早いよっ……」

「早いってことはないでしょ。こういうことは、さっさと決めて実行しないとどんどん踏み出す勇氣、出なくなっちゃうわよ！」

確かにそうかもしれない……

「ラフレ様……」

少し心配そうな顔で見つめてくるロシエ。

「ロシエ……急にびっくりさせたわよね……！ごめんなさい……でも、黙って聞いてくれ

てありがとう……」

「確かにびっくりしましたけれど、ラフレ様がずっと悩んでいたのを知っていましたから……ラフレ様が実行すると決めたなら、私は応援します」

「ありがとう……ロシェ……皆には内緒にしてくれる？心配かけたくないの……魔力ゼロを治せるってわかったら自分から話すから」

「……わかりました。ただ、私にはなんでも話してください。秘密はなしです。これを守ってくださいるのなら、ラフレ様の行動を止めたりしません」

「約束するわ……」

「話は終わった？誰にするか決めないとね！」

セレナが資料を机の上にダン！と置く。控えていた侍女が、新しい紅茶を入れ、マカロンやクッキーも出してくれた。

「お茶しながら決めましょう！先に聞いておくけれど、先生の話を聞いて、誰に頼むかラフレの中で決まってる？」

「……ううん……どうしようって感じ……高位の魔力を持っていて、魔力量も多い人ってすごく限られるよね……そんな人、絶対モテるから私が頼んでも受けてくれるかわからないし……エッチなことしたことないし……無理かもしれない……」

マイナスなことばかり口にしてしまう。

「もう！まだ何も始まってないのにそんなマイナスなこと口にしない！ラフレは可愛いんだから大丈夫よ！」

ロシェが口を開く。

「高位の魔力……ロディオ様のご友人でもあるレオニス様はどうでしょう？若くして騎士団長を務めるほどの魔力を持っておられますし、長年恋人もいらっしゃらないと聞きます」

「奇遇ね、ロシェ。私も、レオニス様がいいと思ったのよ」

「レオニス様……難しいんじゃないかしら……女性が苦手だと聞いたことがあるし……」

「そんなの噂でしょ？最適な相手はレオニス様しかないわ！決定！」

相手が決まってからのセレナの行動は素早かった……一体どこから手に入れたのかと言う情報を次々に持ってくる。

「だから、明後日16時にセレニア通りの時計台前で待ってるのよ！絶対レオニス様が通るから！」

「あ、明後日……！？こ、心の準備が……」

「ラ・フ・レ……？」

「う………やっぱり、頑張る……」

私のためにここまでしてくれたセレナを裏切ることとはできないと、レオニス様へお願いすることに決めた。レオニス様は、兄の学園時代からの友人で、小さい頃はよく遊んでもらっていた。

レオニス様も兄も働き始めて忙しくなってしまうて家へ遊びに来なくなってしまったので、外で時々姿を見るくらいだった。

とても優しい方で、小さいながらに憧れていた。

そんな方にとんでもないお願いをするなんて予想もしていなかったため、待っている今、心臓がバクバクである。

「どうしよう………本当にここを通るのかな……」

1人でここにいるのは危険なので物陰からロシエに見守ってもらっている。ふうーと深呼吸して落ち着かせていると、

「可愛い子が1人にいる」

と、2人組の男性が近づいてきた。今まで家に籠りっきりだったのでこれがセレナが気

をつけてと言っていたナンパか！？と一気に体を硬直させる。

2人はさらに近づいてきて、すっぽりと被ったフードの中を除いてくる。

「わあ、本当に可愛いじゃん！子猫みたい。ね？1人？こんなところで何してるの？ナンパ待ち？」

気がついたロシェが物陰から飛び出ててきているのが見えて安堵した瞬間。

「おい。何してるんだ。嫌がってるんじゃないか？」

綺麗な髪が風でなびき、宝石のようなブルーの瞳が夕日に照らされてキラキラと輝いている。制服の上からでも鍛え抜かれた体を持っているのがわかる。

「な、なんだよ」

「おいっ……こいつっ……いくぞっ！」

そそくさと逃げていく2人。

「大丈夫ですか？」

「あのっ……ありがとうございますっ！」

男性の顔が見えないので、被っていたフードをとって上を向く。

「レオニス、様っ……」

「……ラフレ……か？護衛もつけずにこんなところで何してるんだ？」

「あ……あのっ……あのっ……私と、エッチしてくださいっ……」

「……どうしたんだ、ラフレ……？急にそんなこと言い出すなんて。とりあえず馬車を呼ぼう。陽も沈んできて危険だから、1人で帰らせるわけにはいかない」

レオニス様は、魔道具を出してどこかに連絡している。このままだと、お家に帰されちゃうっ……早く説得しないと……

レオニスの制服をぎゅっと握ると、連絡を中断して優しい表情を向けてくれる。

「どうした？」

「お願いですっ！どうしてもレオニス様じゃないとダメなんです……！」

「何か事情があるみたいだな。さすがに外でできる話ではないから、話ができる店に入ろうか」

手を引かれて歩いていくと、おしゃれな外観のお店が見えてくる。

「急で悪いが、個室、使えるか？」

「はい。ご案内します」

顔馴染みなのか、レオニス様の顔を見るなりすぐ、個室へ案内してくれた。

「紅茶でいいか？」

「……はい……」

「ここならどんな話をしても他人に聞かれる恐れはない。ラフレ、エッチしてほしいとは一体どう言うことだ？」

「……………!!!」

自分がどれだけ恥ずかしいことを口にしていたかレオニス様の言葉で思い出されて、顔が真っ赤になる。

「その……話せば長くなってしまうのですが……」

「かまわない」

届いた紅茶をぐくりと飲んで、息を整えて話し始める。自分の魔力がゼロであること、魔力を増やすためには、高位の魔力をもつ精子を大量に子宮にかけてもらう必要があること。

「ほう。いいだろう」

「ほ、本当ですか……!!」

すんなり承諾してくれてびっくりする。

「ああ、ラフレの魔力が増えるように協力しよう。ただ、私からも条件がある」

「も、もちろんです！私の頼みを聞いてもらうのですから……!!」

「そんな難しいことではない。私の恋人になってほしいんだ」

「…………こ、恋人ですか…………!?!?」

「ああ、両親や仕事関係の人から女性の紹介がしつこくて困っているんだ。ラフレが恋人のふりをしてくれれば、そういった面倒なことも減るだろう?それに恋人であれば頻繁に会っていても周りの人間に怪しまれないだろう?ラフレが恋人のふりをしてくれるならラフレの願いを叶えてやろう」

「…………わ、わかりました…………(魔力を増やす少しの間だけだもの…………)」

「ありがとう、ラフレ。私の魔力を見込んで、お願いしているのだろうから知っていると思うが、私の性欲はかなり強い。たくさん注いでやるから、期待していてくれ」

甘い表情を向けられ、レオニス様の低い声が耳元に響く。

子宮に今までにない感覚が襲ってくる。

「お、お願いします…………」

「では、早速、ラフレの両親に挨拶をしに行こう」

「…………え!?家族には、秘密にしたいのですっ…………心配をかけたくないのです…………」

「ああ、魔力のことについては話すつもりはない。恋人関係になったと報告に行くだけで。挨拶なしに、ラフレに手を出すのは不誠実だろう?」

「……………た、確かに、挨拶した方が良いのはわかるんですけど、先に本当に魔力が増える

か確かめたいんです!!」

「ああ、それもそうか。じゃあ、私の部屋に行こう」

一体いつ馬車を呼んだのかわからないが、既に店の外に馬車が待っていて、レオニス様に支えられて、乗り込む。

とんとん拍子で進んでしまって、心が追いついていない私だったが、いつの間にか馬車は止まり、レオニスの家に着いてしまった。馬車から見ても立派なお城だ。両親は、遠くの領地にいるらしく、王都の別宅に使用人たちと住んでいるらしい。

「す、すごい……」

「おいで、ラフレ」

「まっ、待ってくださいっ!レオニス様のお家はまずいんじゃないでしょうか……!?使用人の方にバレてしまいます……」

「安心してくれ。うちの使用人は口が堅い。事前に連絡もしてるから大丈夫だ」

馬車のドアが開かれ、先に降りたレオニス様の手を出してくれる。既に使用人の男性が控えていて、馬車から降りると、挨拶をしてくれる。

「ラフレ様、ディアベル家へいらっしやいませ。執事のベルターです」

「う、ラフレです。急な訪問なのに、歓迎ありがとうございます」

緊張していたが、挨拶だけはしっかりしなくてはと気合でなんとかその場をやり過ごす。

家の中に入っても手を繋いだままのレオニス様。今から起こることを想像して不安な気持ちになる一方で、小さいころ憧れた人とエッチができると胸が高鳴っていた。

レオニス様の部屋は想像していた通りで、黒に金色の装飾が施された高級な家具に、シトラスのいい匂いが漂っている。

ここでエッチなことをするのかとさらに緊張してしまった。

「こっちが寝室だ」

隣の部屋に入ると、さらにレオニス様の匂いが強く、抱きしめられている感覚になる。

大きなベッドが綺麗に整えられている。腰に手を回されたままベッドへ連れていかれる。

「座って待っていてくれ」

「は、はいっ……!!」

柔らかいマットレスがお尻を包み込む。

数分後、黒いシャツに黒いパンツのゆったりスタイルに着替えたレオニス様が部屋に戻ってきた。

「緊張しているか？」

さらっと隣に腰を下ろし、私の顔を覗いてくる。その表情が見たこともないくらい甘くて、目を逸らすのが、伝えなければならぬことを思い出し、レオニス様へ視線を戻す。

「あのっ……レオニス様………せっ……くすして欲しいとお願ひした分際で申し上げることはないのですが、やり方をあまり知らなくて………」

セックスという単語だけ小さめの声にして濁す。

「ああ、そこは問題ない。ラフレは私に身を任せるだけでいい」

「あ、ありがとうございます………」

レオニス様が進めてくださると言ってくれたおかげで、一気に緊張が解ける。

「痛かったり、やめてほしいと思ったら私に教えること。約束できるか？」

「……できますっ……！」

「いい子だ」

ぽんぽんと大きな手が頭を覆う。

「こうして触れ合うのも初めてか？」

「はい………なので、緊張します………」

レオニス様の長い指が私の前髪を左右に分けると、そのまま頬を撫でる。くすぐったい気もするが、気持ちいい気もする。

「唇の力を抜いて、私の動きに合わせてくれ」

……ちゅっ、ちゅっう……ちゅっ……

「んっ……ふう……」

レオニス様の唇は柔らかくて、触れ合うたびに背中がゾクゾクする感覚に襲われる。軽いキスが何度も繰り返され、慣れていない私は息の仕方がわからなくなり、レオニス様の胸を押す。

「ふはっ……はぁ……はぁ……い、息が……」

「キスをしている時は鼻で息をしてごらん」

レオニス様の顔が近づいてきて、また背中がゾクゾクするキスを繰り返されるが、こつを掴んで、息がしやすくなったので少し余裕を持てるようになった。

……ぺろっ……

「んっ……なにっ……」

目を開けて、確認しようとした瞬間、クチュリと舌が口の中に入ってくる。

「ふうっ……んあっ……」

……クチュっ……ちゅっ、クチュう……チュパっ……

舌を無理やり絡ませられ、部屋には水音が響いていた。頭の中は、恥ずかしさと気持ちよさでいっぱいになり、レオニスの舌の動きについていくだけで精一杯だった。

「鼻で息をするのが上手くなったな。体の力も抜けたようだし、そろそろラフレの体に触れさせてくれ」

「ん……………はい……………」

キスの余韻でぼーっとしたままの頭でなんとなく返事をする。抱きしめられていたはずの体は、いつの間にかレオニス様の膝の上に移動していた。

「ん……………あれ？」

「ラフレが恥ずかしくなって逃げてしまわないように、私が後ろから抱きしめておこう」

お腹に手を回されて動けなくなる。レオニス様は器用に、ワンピースの紐を解き、背中
のボタンを外す。

「少し浮かせるぞ」

「わっ……………」

体がふわりと浮いてびっくりしている間に、ワンピースが脱がされる。

「あっ……ふ、服があっ……」

わかっていたが、実際に脱がされると反射で体を隠してしまう。

「ラフレ、セックスは裸にするものなんだぞ？」

「わ、わかってますっ……でも、やはり、レオニス様に全て見られてしまうのは、まだ心の準備が………！」

「ラフレからすれば、異性の前で裸になるのも初めてのことだから仕方ないが、精子をかけて欲しいんだらう？もっと協力的にしてくれないと出してやらんぞ」

「あ……うう……ごめっなさいっ………」

自分で頼んでおいて心の準備ができてないなどと言ってしまったことに反省する。

「ラフレ、手はどうするんだ？」

指摘され、体を隠していた手をそつと横に移動させる。白生地ピンクのレースがあしらわれた下着が頭になる。

（うう、下着を着ているのにこんなに恥ずかしいなんて………）

「ちゃんとできるじゃないか」

首筋に舌を這わせられ、ちゅくちゅくと肌を座れる。ビクビクと体が勝手に動いてしま

う。

乳房は、下から持ち上げられたり、ぎゅっと強めに揉まれる。

「ふあっ……んん……（触られるところ全部気持ちいい……）」

カリカリと乳首部分を強く刺激される。

「そ、こっ……やあっ……へ、ん………」

「変？ああ、これが快楽だとまだわからないのか。ラフレ、これが快楽だよ。気持ちいいって言ってごらん？」

「き、もちいいっ……？」

下着越しに乳首をつねられる。乳首から脳にかけて軽く電撃がはったかのような刺激が襲う。

「そう。乳首気持ちいいって」

「あ……うう……きも、ちいいいっ……！！」

「ラフレはエッチな子だね。初めてなのにすぐ乳首で気持ち良くなれたし、乳首もこんなにぶっくり勃起してる」

「え………」

下に視線を移すと、いつの間にかブラジャーは取られ、ピンク色の乳首が外気に触れる

状態になっていた。

「あ……………」

反射的に乳首を隠そうと腕を動かしたが、自分の乳首がピンと勃起して、見たことない姿をしていて目が離せなかった。

「ち、乳首が……………」

「この勃起した乳首、ぎゅってしたらラフレの乳首はどうなってしまっかな」

「ぎゅってしたら……………わか、んないっ……………でも、ぎゅってしちゃだめな気がする……………」

「わかんないなら試してみようか。性の知識が少ないラフレのお勉強のために」

レオニス様の綺麗な指で乳首をキュッと挟まれただけなのにおまんこがきゅんと切なくなった気がした。それ以上は、ダメな気がすると思った瞬間、ぎゅっと強い力で摘まれる。

「あぁ……………ん……………」

不思議と痛くは感じない。ぞくぞくと何か解放したい感覚に襲われる。レオニス様の指は乳首をコリコリと刺激するように動き始めた。

「そ、れっ……………だめっえ……………!!!!」

「だめ?どうだめなんだ?」

「ぶ……う……う……気持ち、くてっ……ダメなのおー!!」

「気持ち良くてダメなのか」

レオニス様はそう受け流すだけで、コリコリと乳首の刺激を強くする。両方の乳首がコリコリと刺激され、敏感な耳までもレオニス様の舌でクチュクチュと犯される。

「あぁん………耳も、乳首、も気持ちいい………も、やっ………だ、めっ………も、だめっ………」

何か込み上げてきそうになり、解放しようと体に入れた瞬間、レオニス様の手が乳首からスッと離れていく。

「あ………なんでっ………」

「緊張がほぐれたようだから、乳首はこれで終わりだ」

乳首への刺激がなくなつて、いつの間にか濡れ濡れになっているおまんこに意識がいき、無意識に腰を動かしてしまう。

「ああ、こっちも気持ちよくしてやらないとな」

大きな手で太ももをグッと開脚させられ、クチュリと密穴を下着越しに擦られる。

「まだ何もしていないのに、下着の上からでもわかるくらい濡れているのか」

「あ………うう………（やあ、本当に、勉強したみたいにおまんこがぬるぬるしてるっ

.....」

アナルからクリトリスにかけて、上下にスリスリと擦られる。クリトリスに指が当たるときに、感じたことのない快楽が襲ってくる。

「ふぁ.....！！んん.....」

刺激から逃げようと、腰を動かそうとするも、レオニス様の腕がお腹に回されているせいで満足に動かせない。

クリトリスを下から爪でピンピンと弾かれる。

「あ.....ん！！そ.....！！だ、め.....あぁ.....気持ち良くて、おかしくなるっ.....！！」
なんか、きちゃうっ.....！！」

また、乳首の時と同じように、何か解放したい感覚に襲われ、息を止めて、グツと体に力を入れる。

「ふぁ.....！！気持ちいいいい.....！！！！」

.....カリっ、カリっ.....

キュツと密穴を閉めるように力を入れる度に、レオニス様の指がクリトリスからほんの

少し離れて、物足りない刺激になる。このむず痒い感覚に耐えられなくなってしまい、
「れ、レオニス、様っ……!!」

「ん？ラフレ、どうした？」

「も、もっとずっとカリカリしてくださいっ………」

「どこを刺激して欲しいんだ？具体的に言ってくれないとわからないぞ」

「ん………く、クリいい……クリトリスっ……カリカリして欲しいですっうう……」

「ああ、きちんと言葉にしておねだりできたね。ご褒美に、たくさん虐めてあげよう」

欲しかった刺激がやっくとくると、レオニス様の指から視線を外すことができない。

「はあっ………ん………（くるっ……やっつと、このムズムズ解放できるっ………!!）」

先ほどと同じように下着越しにカリカリとクリトリスを刺激されたり、強く押しつぶされ、左右にコリコリと振られる。

「あうう………気持ちいいっ………そこっ気持ちいいのおお………♡♡♡」

腰が勝手にヘコヘコと動いてしまう。

レオニス様のもう片方の手が、虐められて敏感になった乳首をぎゅっと潰す。

乳首、クリトリスを同時に刺激され、絶頂の波がすぐやっつてくる。

「き、ちやうっ………なんか、きちやううう………!!」

経験したことの無い感覚に襲われ、怖くなった私は、レオニス様の腕をぎゅっと掴んでしまう。

「絶頂しそうなんだな。ラフレ、イクって言ってごらん」

「い、イク？……ん……ああ……！！……気持ちいい……い、くっ……イク、イク、イク……！！」

耳の中はクチュクチュと舌で舐め回される音が響き、乳首とクリトリスは、絶えず刺激され、何かが弾ける感覚に包まれる。頭は真っ白になり、勝手に体がビクビクと震える。

「はあ………はあ………んん………きも、ちいい……♡（これが絶頂……♡）」
解放できたことが嬉しくて、顔が綻ぶ。

「初めてなのにいっぱいイクイク言えて偉いな」

ポンポンとお腹を優しく撫でられる。息が少し整うと、レオニス様が横抱きにしてベッドに寝かせてくれる。

「ラフレの小さなおまんこに俺のものが入るようにきちんと解さないといけないから、先ほどみたいにきちんと言葉にして教えてくれ」

「………は、いっ………（レオニス様の、やはり大きいのかしら……）」
するとパンツを脱がされる。トロツと愛液の糸が伸びる。

「ラフレ、私がほぐしやすいように自分で足を持ってくれるか？」

「あ、し？」

「ああ、こうして、ここを持っていてくれ」

レオニス様は、私の太ももを開脚させる。おまんこがぱっくりと隅々までレオニス様に見えてしまう姿勢にさせられる。

「あ……………あ……………ダメっ……………見ちゃだめっ……………」

「ラフレ。おまんこちゃんと見せてくれないと傷ついていないか、ちゃんとほぐれているのがわからないだろう？ちゃんとほぐさないで入れるとおまんこが傷ついてしまうだろう？」

「うう……………」

ごもつともだと思い、震える手で自分の太ももを押さえると腰の下にふわふわのクッションを挟まれ、おまんこがレオニス様の顔に近づいてしまう。恥ずかしくてレオニス様の顔を見られない。

「うん。ラフレの可愛いおまんこがちゃんと見える」

視線を横に逸らしていてもレオニス様が自分のおまんこをじっくり見てるのがわかる。「ラフレ、見てごらん？さっきいっぱい弄ったから、乳首のように可愛く勃起してるよ」

言われた通り、視線をレオニス様の方へ戻す。ピンク色に染まって、ほんの少し勃起しているのがわかる。

「あ、うう……」

自分のおまんこの状態を詳しく解説されてさらに恥ずかしくなる。

クチュクチュと指で密穴の浅い部分を刺激される。愛液がたっぷりついた指でクリトリスの周りをくると撫でられる。「ん……………ふぁっ……………」

密穴をぎゅつとじめるたびに、膣に収まりきらない愛液が垂れ始めているのがわかる。軽く撫でられるだけでも刺激が強くてビクビク体が震えてしまう。

「あ……………うう……………つ、よいい……………」

何度も愛液を救っては、クリトリスに垂らされ、コリコリと皮の上から刺激される。

「クリっ……………またさちゃうっ……………イッちゃうっ……………」

「もうイきそうなのか」

ピンピンとクリトリスを弾かれ、刺激が強すぎてすぐ絶頂してしまう。余韻に浸ろうと体の力を抜くが、クリトリスが温かい何かに包まれ、顔をグツと下に向ける。

「……………！？！？れ、レオニス、様っ……………あ……………だめえ……………汚いからやあっ……………」
「ラフレの体に汚いところなどない」

レロレロとクリトリス全体を隈なく舐め回される。

「ふぁづ……♡気持ちいいっ……くりっ、気持ちいいのお………」

柔らかくて温かい舌はあまりに気持ちよくて、もっともっとと求め始めていた。

「ラフレの愛液は甘くて美味しいな。中毒になってしまいそうだ」

……クチュ、クチュ……チュパっ、ピンピンっ………